

令和 4 年 6 月 17 日現在

機関番号：34419

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2016～2021

課題番号：16K21483

研究課題名（和文）武力紛争の社会的要因に関する研究 シエラレオネ内戦後の首長層と都市若年層

研究課題名（英文）Examining Social Factor of Armed Conflict: Chieftancy and Urban Youth in Sierra Leone

研究代表者

岡野 英之 (Okano, Hideyuki)

近畿大学・総合社会学部・准教授

研究者番号：10755466

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,000,000円

研究成果の概要（和文）：本研究の目的は、紛争の社会的な要因とされている首長層、および、都市若年層の紛争後の変化を追うことである。本年度は首長層の変化についての役割を明らかにすることとした。本研究の対象となるシエラレオネはエボラ出血熱の惨禍に見舞われたこともあり、エボラ出血熱流行時に首長層がいかなる役割を担ったかを明らかにする。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は紛争後にいかに社会が変容するのかの一端を明らかにするものである。1990年代には冷戦構造の崩壊によって多くの武力紛争が発生した。シエラレオネはその一つであれ、平和構築の成功事例といわれる。ゆえにシエラレオネの事例を検討することで、紛争を助長するような社会構造がいかに解体されるのか、そして、かつて紛争の社会的要因といわれた社会階層がいかなる変容を遂げるのかを明らかにすることができる。その変容を明らかにすることは、紛争解決の取り組みへとつながる知見を得ることに他ならない。

研究成果の概要（英文）：The purpose of this research is to examine how social factors change in post conflict situations. Especially, this research takes the case of Sierra Leone, and analyze chieftancy and urban youth, which have been considered as social factors of the civil war. Since this country experienced Ebola crisis in 2013-2016, this research tackles to the above-mentioned question, by examing the roles of them within the Ebola crisis.

研究分野：文化人類学

キーワード：シエラレオネ 平和構築 首長層 都市青年層

1. 研究開始当初の背景

1990年代のアフリカでは大規模な武力紛争が頻発した。2000年代に入るとそうした紛争は次々と収束傾向を見せ始め、国際社会は平和構築の事業を紛争経験国で実施するようになった。武力紛争が発生した国では、紛争が再発しやすかったり、社会が不安定化しがちである。その一方でシエラレオネでは安定を取り戻し、紛争を作り出した社会構造はある程度解体されたといわれている。では、武力紛争に大きく寄与したとされる社会階層はどのように変化したのであろうか。

2. 研究の目的

本研究は、武力紛争を経験した国がいかに紛争構造から脱却するのかを明らかにすることを目的とする。その検討のために西アフリカのシエラレオネを事例とした。シエラレオネ社会は、内戦(1991-2002年)が終結した後、数十年を経て大きく変容した。なかでも注目したいのが、紛争の要因といわれた2つの社会階層、すなわち、青年層と首長層である。

シエラレオネ内戦の研究蓄積は多く、内戦の要因もある程度、明らかにされている。とりわけ、シエラレオネ内戦では、社会で行き場を失った若者が武装勢力「革命統一戦線」(Revolutionary United Front: RUF)RUFに吸収されたことで、社会が混乱したとされる。人類学者リチャーズは、農村部では、コミュニティのリーダー層、すなわち、首長層による腐敗の横行によって多くの若者が困窮したと指摘する。シエラレオネでは伝統なリーダーである首長(chief)が公的な行政職を負う首長制度が採用されている。首長は行政分「首長区」(chiefdom)の行政長である。リチャーズによると1980年代の経済悪化で困窮した首長層は、自らの権力を乱用し、村の若者(特に血縁・婚姻関係にない家系の若者)に対して不当な罰金を課したり、私的な目的でコミュニティ労働に動員したりした。こうした横暴に不満を持った若者の多くがRUFの蜂起を新たな生活を見つけるチャンスだとみなし、RUFに加入したといわれている(Richards 2002)。一方、都市部の若者層の研究を行ったのはアブドゥラーである。アブドゥラーによると、都市部では経済悪化の結果、仕事がない若者が滞留することになった(農村から都市部への若者の流出は首長の横暴と無関係ではない)。1980年代に隆盛した学生運動は、大学を飛び出し、都市部の無職の若者たちを巻き込み、その一部がRUFの結成に関わった。一度RUFが蜂起すると、都市部の若者は知り合い関係を通じて集められ、次々と加入することになる。その中には内戦に乗じて略奪や密輸で利益を獲得する者も出てきた。こうした者は、政治改革を目標に掲げた指導層と反目し、指導層を次々と暗殺したといわれている(Abdullah 1998)。

このように従来の研究では、武装勢力RUFが隆盛した背景には、農村部における首長層の横暴、および、都市部における若者の滞留という2つの社会的要因があることが指摘されている。しかし、内戦の社会的要因が内戦後いかに変容したのかは十分論じられていない。

シエラレオネでは 1999 年のロメ和平合意後、国連が介入し、紛争が終結することになった。当初は混乱があったものの、やがて武装勢力も解体され、政府軍も縮小された。こうした内戦収束に向けての変化に関しては、研究がないわけではない。しかしながら、国連諸機関や NGO の介入の在り方を模索することを主眼としており、国内に目を向けた研究は限られている。ゆえに本研究では、首長層と青年層という内戦の要因となった社会階層が内戦後どのように変容したのかを明らかにする。本研究は将来の平和構築ミッションにも参考にもなりうる紛争後社会の変化を明らかにするという点で意義を持つ。

3 . 研究の方法

本研究は現地調査が要となった。2016 年および 2017 年にそれぞれ 3 - 4 週間の現地調査を行った。もう一度、補足調査を実施するつもりであったものの、コロナ禍によって断念した。ちょうど現地ではエボラ出血熱の流行が収束していた時期であったために、エボラ危機下において首長層および都市若年層が、エボラ危機においてどのような役割を果たすことになったのかを明らかにすることになった。各年度の調査実施状況は以下の通りである。

(1) 2016 年度

2016 年の紛争後の首長の役割について調査した。現地調査は 8 月から 9 月にかけて 3 週間実施した。各農村を回り、首長層をはじめとした農村のリーダー層に聞き取り調査を行った。調査の結果、エボラ出血熱流行時の首長の対応がある程度、明らかになってきた。特に政策レベルで首長層がどのように明らかになったのかを明らかにした。政府は首長が積極的にエボラ出血熱の対応に関わることを期待し、首長もそれに応じている。

(2) 2017 年度

2017 年のフィールドワークでは都市部のコミュニティ・リーダーの役割を明らかにするためにシエラレオネの首都フリータウンで調査を行った。8 月から 9 月にかけて 3 週間実施している。特に郊外の町に焦点を当て、エボラ出血熱を防ぐためにいかなる措置を講じたのかについて聞き取りを実施した。その調査の結果、エボラ出血熱流行時、各コミュニティでは検問が作られ、人々が自発的にエボラ出血熱対策を行ったことが明らかになった。各コミュニティの長である首長層は、政治家（国会議員や地方議会議員）と関係を持ち、検問を維持するために必要な物資や金銭を受け取っていたことが明らかになった。すなわち、国家の制度ではなく、人脈を通してエボラ出血熱対策が行われていたことが明らかになった。

(3) 2018 年度

文献研究および研究発表に重点を置いた。5 月に開催された日本アフリカ学会学術大会、および、6 月に開催された日本文化人類学会において口頭発表を行い、それ以降に、その口頭発表をもとにした論文を執筆した。当論文は雑誌「文化人類学」の査読を経て採択された。また、それ

以降、2017年度の現地調査で集めた資料の渉猟を行うほか、文献調査を進めた。

(4) 2019年度

本研究は最終年度であったものの、調査の遅れのために補助事業期間延長承認を申請した。8月に予定していた現地調査ができなかったからである。これまでの成果は、イギリスで開催された国際学会、「第8回ヨーロッパ・アフリカ学会」(the 8th European Conference on African Studies)で発表したほか、遠藤貢・末近浩太編『紛争と国家破綻が問う「国家」』(シリーズ、グローバル関係学)(岩波書店)の一章を執筆し、本研究の成果を公表した。

(5) 2020年度

コロナ禍のためにこれ以上の調査を断念し、文献調査を続行する。本研究の最終成果となる書籍の執筆に専念した。

(6) 2021年度

書籍の執筆を終え、出版社探しやその後の出版に向けての作業に費やした。本研究成果は『西アフリカ・エボラ危機 2013-2016』(ナカニシヤ出版、2022年2月)として上梓された。

以上が全調査プロセスである。では、どのような研究成果を得たのかを以下にまとめる。

4. 研究成果

現地調査の結果、紛争後のシエラレオネでは官僚制や民主主義がある程度、定着し、不十分なながらも透明性のある統治が実施されていることを確認した(岡野 2019)。首長層も、その制度を改革後、コミュニティのリーダーとして有効に機能している。エボラ出血熱の流行時にもコミュニティレベルでの対策を主導する役割を果たした(岡野 2022)。さらに都市青年層についても、社会不安を煽る社会階層であるという認識は薄くなっている。インフォーマルセクターをはじめとした雇用があるからであり、対立を煽るような政治家の姿もない。さらには、都市部で多く作られるアソシエーションが人々の横のつながりを確保することを可能としている(2019)。エボラ出血熱流行時にも、若者はコミュニティレベルの対策で動員され大きな役割を果たした。本研究を総括すると、シエラレオネでは社会が安定化するにつれ、かつては不安定要素となっていた社会階層も、新しい社会になじんでいった。シエラレオネは開発上、社会上の課題は山積しているものの、紛争を再発させるような社会構造は解消されているといえる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計4件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 2件）

1. 著者名 岡野英之	4. 巻 29
2. 論文標題 「若者」言説が作り上げた新興エリート 紛争後シエラレオネにおけるバイクタクシー業業界団体の考察から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 スワヒリ&アフリカ研究	6. 最初と最後の頁 18、37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 岡野英之	4. 巻 48 (1)
2. 論文標題 民主的で官僚的なパトロン＝クライアント関係 - 内戦後シエラレオネにおけるバイクタクシー業と交通秩序 -	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 文化人類学	6. 最初と最後の頁 19、38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 Okano, Hideyuki	4. 巻 143
2. 論文標題 How EVD (Ebola Virus Disease) Spread and How People Respond: Socio-political Analysis of the Epidemic in Sierra Leone and Liberia”	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 Bulletin of the National Museum of Ethnology	6. 最初と最後の頁 163、185
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -
1. 著者名 岡野英之	4. 巻 109
2. 論文標題 アフリカに見る内戦下のセキュリティ・ガバナンス シエラレオネにみる民主主義が担保する「協調行動」	5. 発行年 2016年
3. 雑誌名 人文科学研究所紀要	6. 最初と最後の頁 71、98
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 2件 / うち国際学会 3件）

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「シエラレオネにおける国家を補完する人脈ネットワーク - エボラ危機（二〇一四 - 二〇一六年）からの考察」
3. 学会等名 岩波叢書「グローバル関係学」シリーズ刊行開始記念Book Launch Series 2 『「紛争が変える国家」を語る』
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「社会的経験としてのコロナ禍 - 何がどのように問題とされたのか - 」共通論題「タイにおけるコロナ禍の現状と今後の展望」
3. 学会等名 日本タイ学会2020年研究大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「隣国で消費されるナショナリズム ミャンマー内戦におけるシャン人ナショナリズムと隣国タイのシャン人移民」
3. 学会等名 日本国際政治学会2020 年度大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 OKANO, Hideyuki
2. 発表標題 Bridging between the Governmental Policies and Local Measures: Patronage Network of Political Elites in the Ebola Epidemic in Sierra Leone
3. 学会等名 the 8th European Conference on African Studies (ECAS 2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 エボラ出血熱対策をローカル・レベルで理解する 西アフリカ・シエラレオネの経験から
3. 学会等名 関西国際保健勉強会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 エボラ出血熱をめぐる人々の経験 - 首都フリータウンを事例に -
3. 学会等名 日本アフリカ学会第56回学術大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「政府の政策とローカルな対策を架橋する シエラレオネ・エボラ危機における人脈ネットワーク」
3. 学会等名 日本アフリカ学会第2018年度研究大会（北海道大学，2018年5月27日）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「ローカルな秩序から国家性へ - 内戦後シエラレオネに見るバイクタクシー業と交通秩序 - 」
3. 学会等名 日本文化人類学会第2018年度研究大会（弘前大学，2018年6月2日）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 「人脈ネットワークとしての武装勢力 - 西アフリカ・シエラレオネ内戦とインフォーマルな国家統治 - 」
3. 学会等名 京都人類学研究会2018年度6月例会（京都大学，2018年6月22日）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Okano, Hideyuki
2. 発表標題 Fighting against the Ebola Virus Disease (EVD) in Sierra Leone: Local Notables as Mediators of “ Formal ” and “ Informal ” Response ”
3. 学会等名 the 7th European Conference on African Studies (ECAS 2017) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 シエラレオネ農村部におけるエボラ出血熱対策 - 首長をはじめとするローカル・エリートはどのような役割を担ったか
3. 学会等名 日本文化人類学会2017年度研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 国家形成につながる国家形成の＜試み＞ アフリカにおけるstatehoodをめぐる政治学・人類学 : 趣旨説明
3. 学会等名 日本アフリカ学会第2017年度研究大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡野英之
2. 発表標題 エボラ出血熱の拡大と人々の対応 シエラレオネの事例から
3. 学会等名 日本アフリカ学会第53回学術大会
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Okano, Hideyuki
2. 発表標題 "Managing the Ebola Crisis in Sierra Leone:How Local People and the Government Achieved Collaboration?"
3. 学会等名 Special Seminar in Graduate School of International Development, Nagoya University (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Okano, Hideyuki
2. 発表標題 "International Aid and Local Response against Ebola Crisis: The case of Sierra Leone,"
3. 学会等名 大学院生向け公開講座(一橋大学) (招待講演)
4. 発表年 2016年

1. 発表者名 Okano, Hideyuki
2. 発表標題 "Never-ending Nation-building? Examining 'Frontiers' of Contemporary Modern-states,"
3. 学会等名 IUAES Inter-Congress 2016 (国際学会)
4. 発表年 2016年

〔図書〕 計4件

1. 著者名 未近 浩太、遠藤 貢、松本 弘、小林 周、山尾 大、久保慶一、増原綾子、鷺田任邦、ウイン ウインアウン、岡野英之	4. 発行年 2020年
2. 出版社 岩波書店	5. 総ページ数 216
3. 書名 紛争が変える国家	

1. 著者名 Hideyuki Okano	4. 発行年 2019年
2. 出版社 Langaa	5. 総ページ数 464
3. 書名 Politics of Human Network in African Conflicts: Kamajor/the CDF in Sierra Leone	

1. 著者名 足立研幾編（岡野英之は共著者として参加）	4. 発行年 2018年
2. 出版社 ミネルヴァ書房	5. 総ページ数 312
3. 書名 セキュリティ・ガバナンス論の脱西欧化と再構築	

1. 著者名 岡野 英之	4. 発行年 2022年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 296
3. 書名 西アフリカ・エボラ危機 2013?2016	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------